

総合活動型日本語教育と私

被支援経験者の視点から見る 支援のあり方

林逸菁

■ はじめに

このレポートでは私がかつて学習者として総合の授業を履修した時の経験に基づいて、被支援者という視点から「総合活動型日本語教育とは何か」について仮説を立てた。そして、今回自分がサポーターとして総合実践に参加してきた三ヶ月にわたって、他者との対話、総合の授業観察と授業中の議論を通じて、仮説に書いてある総合への捉え方や総合における支援のあり方について、いろいろ考えさせられた。このレポートは私の考えが変化するプロセスを記するものである。

■ 1. 動機と仮説

私は以前「日本事情・言語文化」の授業を履修したことがある。その授業も「実践研究の総合3-6」と同様、総合活動型日本語教育の一環として行われており、授業の内容は「私にとっての魅力的な人」というテーマで、レポートを書き上げていくという活動であった。その活動の中、私を含めてクラスの履修生たちの顔つきと距離は授業が重なるにつれて変わってきた。みんなが無関心の表情から生き生きした顔になり、お互いの距離は山手線に例えると、高田馬場と東京から高田馬場と新宿までのように縮んだ。その変化は学習のモチベーションの高まりへと繋がった。それは言語習

得を促進させる一つの大事な活性剤であると思った。この発見は日本語教育経験ゼロの私の中では大きく響いた。教室はただ何かを学習させる場所だけでなく、人と人の付き合いが深まり、お互い影響し合う、学習者の心を動かす場所でもある。教師はそのような環境作りは何よりも大事だと思った。

人の心を動かせる授業を目指すために、今回は学習者のレポートの執筆活動を支援するという役目のサポーターとして総合3-6クラスに入った。そして、実際に授業に参加したら、サポーターの中でも支援のやり方がそれぞれ異なることがわかった。それで、総合活動型日本語教育ではサポーターの支援はどのようなことであるのかを考え始めた。このように考えていると、私なりに認識している「支援のあり方」は問題の中心となってくる。私が認識している支援のあり方は、以前履修した「日本文化・日本事情」の授業の経験に基づくものであり、上の立場から下のものを助けるのではなく、学習者と平等でありながら第三者の立場で客観的に学習者同士のインターアクションを促進（活発化）させるという役割を果たすことである。サポーターが第三者の立場であっても、学習者同士のインターアクションを優先した上で、自分の考えを出したりして、学習者たちの議論にも入り、みんなで話し合ううちに、サポーターも学習者もそれぞれの身分の境目がなくなるほど平等で親密の関係を築き、一つの共同体となる。それが私の経験に基づき、自分なりに描いた総合活動型日本語教育の理想図である。

今回の総合3-6クラスでは、サポーターは何人もいるので、支援のあり方に関する認識・定義はそれぞれ異なっているだろうと思う。そうすると、学習者をいかに上手く支援するために、サポーターたちの協調的なチームワークができるのかは非常に大事に関わってくるといえる。つまり、学習者はレポートを書き上げるという目標を達成するのに、学習者同士たちのインターアクションが大事だけでなく、学習者たちとサポーターたちのインターアクションも必要とされる。このように、私にとっての総合活動型日本語教育を、学習者もサポーターもみんなが一つとなり、同じ目標に向かって共同活動をするうちに、お互いの付き合いが深まり、影響し合いながら、言

語習得のみならず、人間関係、自分への認識、考えの確立なども成長していく場として捉えたいと思う。

■ 2. 対話

2.1. 対話の相手を選んだ理由

私はディスカッションの相手に総合実践を履修した経験がある Y さんを選んだ。Y さんを選んだ理由は二つある。

一つ目は、Y さんが体験した総合クラスは私が以前経験した「日本事情・言語文化」のクラスと同じ、学習者同士のインターアクションが中心となる活動が行われている環境だったからである。同じ学習同士のインターアクションが中心となる学習環境の中で、実際に支援を行っていた Y さんに、支援の体験に基づいた私なりの支援に対する認識（立場）をぶつかったら、面白い話し合いができるのではないかと考えたのである。

二つ目は、Y さんが体験した総合クラスは学習者同士のインターアクションが中心であることに反して、私が今履修している実践の総合クラスは、学習者とサポーターとのインターアクションが中心となる傾向があるからである。このような環境の中で支援を観察している私は、学習者同士のインターアクションが中心である環境で支援を行った Y さんと、それぞれの異なった視点から見た支援について対話したいと考えている。

2.2. 親密な関係と慣れあいの危険性

私は「日本事情・言語文化」を履修した経験を語り、それに基づいて捉えた総合活動型日本語教育について Y さんに話した。そして、Y さんもかつての総合活動型の実践経験を話してくれた。Y さんのグループでは、自発的な意見を言わずにずっと黙っていた学習者や他人の意見・コメントを取り入れない学習者がいたこと、課題提出の

締め切りを守らなく、活動が重なっていくとしても状況が変わらなかったこと、レポートを検討する番だった人が授業に遅れてきたりして、話し合いの時間に内職したりしていた学習者がいたなどの問題があった。これらの問題点はクラスのメンバーの関係が親密になることによってお互いにプラスに影響をし合っていくという私の予想に反した。そこで、私はYさんがいたグループでは、学習者同士の関係、また学習者同士のインターアクションについて聞いてみた。

Y：学習者同士は、和気藹々仲良く授業を楽しんでいたが、逆にレポートの活動に慣れあっているというのを常々感じていた。確かに学習者が一生懸命書いてきたし、話し合いのときもそれなりの意見を言っていたが、グループの全体で流れている慣れあいの雰囲気というのは払拭できなかった。しかし、最後の総合評価では、他のグループと評価しあうときに、逆にみんなが真剣になったので、すごくよかった。だから、ある意味の良い緊張感が必要だと思った。

L：学習者に自由に発話できる場所を提供するのは大事だが、講義形式で授業をやってきた受身の学習者に対して、最初から教師、それかサポーターが発話順を振ったりし、ある程度その場をコントロールしたりする必要があると私は思う。特に学習者たちがだれってきたら、教師、それかサポーターが少し力を強く入れても良いと思う。教室という場は、おしゃべりの場ではないので、ちゃんと時間を守るのは学生としての基本だと思う。それができない人に強制的に要求することは干涉ではない。

Y：時間を守る、提出の締め切りを守るといった規律を守ってほしいことを最初から強く示す必要がある。教室かつ学校場面で活動している限りは、学生としての基本の規律というものは絶対必要だと考えている。最初から慣れあいということをしていなかった。では、なぜそういうことが起こるのかを最初から考えると、最初は最低限のルールを守られていないことは原因だったと思う。一つの目標に向かってみんなが頑張っていく教室にしない限り、慣れあいになるという危険性も大きいし、この活動の意味がなくなるのではないかと思っている。

L：Yさんの経験を聞いて、学習者同士の親密な関係を構築することは、一つのクラスαとなるが、それだけで必ずしもクラス全体を良い方向に向けられるわけでもないと思った。親密な関係の中で、慣れあってしまう危険性もあることがわ

かった。慣れあいのような雰囲気流れないように、学習者にある程度の緊張感を与えることは大事だと思った。

Y: 学習者同士の親密な関係は一つの要素だと考えられる。学習者は働きかけによって変わる。誰か変われば、それで学習者同士間また影響し合える。だから「働きかけ」の方法は大切だと思っている。人間は知らない人になかなかいえないというのは普通なので、学習者同士の関係が親しくなることは大前提としてあったほうがいい。それからもう一步、本当に意味のある活動というところは問題だと思っている。そこで、クラスの運営の仕方に非常に重要だと思っている。

Yさんの話の中、学習者同士の親密な関係の中で、慣れあってしまう危険性もあるということは一番印象的だった。そして、私はなぜ親密な関係から慣れあいの雰囲気に流れてしまうのかを考えてははじめた。私とYさんが同じように、教室場面では学生としての基本の規律が必要だと考えている。Yさんは学習者に守ってほしい規律を最初から強く示すことは大切だと言った。この時、私はYさんの意見に賛成し、教室において学生は学生の基本の役割を果たすべき、教師は学生の規範を管理する権利があるというふうに、教室場面における教師・学生の立場を捉えていた。そうすると、慣れあうことはなくなるのではないかと思った。しかし、この後、この捉え方はYさんとの対話と実践授業の議論で変わってくる。

2.3. 初級レベルでの総合活動型日本語教育の可能性

Yさんは自分の実践の経験を語った際に、総合クラスでは初級レベルの学生にとって、自分の文章を書くのはもう精一杯で、他人の文章を読んでコメントをすることは大変だと思い、初級レベルの学習者に限界があると感じたようだ。このことに対して、私は反対な意見を述べた。

L: 人のものを読んで、そしてコメントをするということは、今までの教育では学習していないことだと思う。自分のものだけで精一杯だとわかっているが、自分のことしかやらないというのは自己中心でよくないと思う。学習だけでなく、人との接し方などいろんな面に関しても他人のことにも感心を持つという姿勢が必

要であると思う。そのような動きがあれば、自分自身が変わり始まる。だから、他人のものを讀んだり、コメントをすることができるかどうかは、日本語能力以前の問題だと思う。私は総合活動型の日本語教育は、他人へコメントしたり、他人の意見を受け入れたりすることができるように、学習者の心を動かせる力があると思う。私はギフ&テークの考えで、「日本事情・言語文化」の授業の活動に取り組み、他人の文章にコメントをし、もらったコメントを自分の文章に取り入れるようにしていた。このようにクラスに何人かが少し動き出すと、クラスのメンバーに何らかの影響を与える。そして、みんながそれを真似したり見習ったりするようになり、だんだん自己中心かつ受身の立場から、他人に関心を持つ、自発的な発言をするなど自主的な姿勢となった。

ここでは、私は自分が「日本事情・言語文化」を受講したことを振り返ってみて、コメントをし合うなどの他者との関わりについて改めに考えた。学習者同士間のお互いの影響は、教師から権威的な指示や強制的な規定より強い力を持っている。それはクラスに懸命に授業活動に取り組む人がいれば、何らかの形で他のクラスメンバーを引っ張ることができるからと考えたのである。

Yさんと対話したとき、私は総合活動型の日本語教育は、学習者の心を動かせる力があると考えた。その後、私はさらに、なぜ自分が初級学習者でも総合の活動を実行することができると思ったのかを考えてみた。

L：初級で出てくる問題点を考えると、一つは他人とのインターアクションというのがある。文章を讀み合う、他人の文章を讀んで、コメントしたり、意見を交換したりするなどの他人とのインターアクションがあると思う。私が捉えた総合とは、学習者たちとリーダー、サポーターたちとの関係が親密になり、影響し合っていて、一つの目標に向かって、共同活動をしているうちに、言語学習の上達、人間関係の構築、自分への再認識、などの物事に対して改めに考えさせる場所だと思う。だから、他人とのインターアクションがないと、結局総合のクラスでも、今までの従来の教室と同じように、他人に無関心で、他人とのインターアクションが行われないままで自分のことだけやっていけばいいということになる。だから、私が考える総合は人にいろんなことについて考えさせる場所だから、クラスメ

ンバーと共同活動をしているうちに、考え方とか認識などを変えさせる場所だから、こういうことをやるのは、やっぱ日本語能力と関係なく、相手が人間であれば、できるのではないかなと思う。

Y: 私もそう思う。基本的には。でも、そこに作文なりという介在するものがあるって、それが読めない状態だと、それを通してやるというのはかなり厳しくなる。だから、逆にいえば、学習者の認識を変えたりすることは、日本語クラスの中でやる場合に、よく考えてやらないと、そこまで行かずに終わってしまう可能性がある。言語レベルが高いレベルの人たちに関してはまだ問題がないと思うけど、初級の人たちの場合は、ある程度よく考える必要があると思う。初級の場合は読むまで時間がかかるし、理解するまで時間がかかるし。上級者だったら、ある程度の蓄積があるから、わかる言葉から推測することが可能だけど。

この対話のやり取りにより、Yさんは総合活動型が実行する可能性について、学習者の言語能力が大きい要因の一つだと考えているようだ。また、Yさんはどうしても自分の総合実践の経験に基づいて考える傾向があると強く感じた。

2.4. 学習者主体のクラスにおける学習者の自己責任

Yさんと話したあと、私はYさんの考えを納得して、学習者に皆認識されているルールをあらかじめ提示する必要があると思った。しかし、この考えが学習者同士が自然にできているインターアクションのほうは大事だということと矛盾しているということは、私が「言語・文化」を振り返ってみたときに改めに気づいた。その後、総合実践の授業での議論を通して、私は初めて総合クラスの設計として、学習者の自己責任というものが組み立てられていることを知った。総合は学習者主体のクラスであって、学習者が教師やサポーターの言うことに従うのではなく、自らやっていくということが望ましいのである。そこでは学習者の自己責任が問われ、学習者の自己責任がないと、クラス活動が崩壊することになるそうだ。この話をYさんに話すと、

Y: 自己責任というスタンスでやるんだったら、関わる側としてある程度無責任に、それは自己責任だから仕方がないです、と私も言っちゃっていいのかなと思うけ

ど。教師はどれくらいサポートしていくかというので、総合の形で考えれば、全体を作り上げていくというのが一番望ましい形だと思う。リーダーとかはうまく話を円滑進めて行けば、それで一番いいと思うけど。そうじゃない場合、ある程度私はその部分を引っ張るとかということが必要になってくるじゃないのかなと思う。そうすることによって、学習者も動かされるものがある、それがうまい方向に行けば、それでオーケーだと思うし。

Yさんは学習者の自己責任に任せることは、教師側、サポーター側の責任を放棄することになると考えている。Yさんは学習者の自己責任を前提としている学習者主体クラスという考えに賛成できないようだ。それで、Yさんに学習者主体のクラスについてどう考えるかを聞いてみた。

Y：まず学習者がそこでこれをやろうという気持ちがないとだめだよ。それがなかったら、学習者主体は絶対成り立たないんじゃないのかなと思う。最初その気になっていなくても、うまい持っていき方で学習者が乗ってくる場合もあると思うね。それは示したもので、最初だけ示してあげれば、後はたぶん学習者たちが自分たちで積極的に動いていく。

L：そうだね。総合の授業は従来の授業のやり方と違うから、すんなりと受け入れる人もいれば、抵抗感を感じる人もいると思う。だから最初は、いきなり自分たちでやれと言われても、何をすればいいのかわからないから、教師なりサポーターなりの道案内の人が必要だと思う。そして、もしクラスで学習者の中で一人か二人ができれば、やっぱ他の人もその人たちに真似して、見習うよね。

Y：学習者の中で一人か二人が周りを引っ張っていくことがあると思うけど、そこから漏れる学習者も絶対いるよね。私が入ったグループではそういう状況だったから、だからその規律じゃないけど、そこら辺から変えていくことで、学習者にもう少し緊張感が生まれるんじゃないのかな。

L：でも、そういうものが入ると、学習者主体じゃなくなるかな。

Y：でも、別に規律だけじゃない。早く来てくださいますかとかそういうことだね。

L：Yさんのケースだけ話すと、やっぱ遅刻などの問題になっちゃうよね。

Y：でも、私はすごいそれが気になるよ。もうそこに全部が集約されてる気がしてたから。私だったら、絶対こは何かしてほしいと思った決められているルー

ルは守らなかったら、みんなが勝手に動いてたら、クラスは成り立たないし。

Yさんは意味のある活動を持っていくために、学習者の自己責任を問うことより、教師側は何らかの形で学習者を引っ張ったりする必要があると考えているようだ。このことから、Yさんが教師かサポーターかとしての責任を執着しているような印象を強く受けた。一方、私は学習者主体クラスにおいて学習者の自己責任が問われることが理解できるが、それを全部受け止めることはまだできない。

L: 私もよくわからないけど、自己責任は、最初から持っている人もいれば、この活動を通して養うんじゃないかと思うけど。だから最初から自己責任がない人はもうこの活動ができなくなると言われると、なんかみんなが最初から自己責任ができるわけではないじゃんと言いたくなる。

Y: それはそうだと思う。だからそれが出てくるように、やっぱりこっちはある程度働きかけなきゃいけないんだよね。何も言わずにほったらかしにしておいて、それでオーケーじゃないでしょうというような気がする。私はやっぱりそこに返ってしまうわけ。活動をよりいいものにしていくためには、できてないものはちょっと働きかけないとだめじゃないのかな。なるべく自己責任がある人を生かしながら、ない人は出るような形にするためにも、やはり働きかけるというのは必要だと思う。

私もYさんも学習者の自己責任はクラス活動を通して養うと考えている。Yさんが言った「なるべく自己責任がある人を生かしながら、ない人は出るような形にするためにも働きかけるというのは必要だ」ということは確かだと思った。しかし、学習者に自己責任があるかどうかを教師側は見極めることができるのかに疑問を感じた。ここで、私は自分にとって自己責任とは何かを考えてみた。遅刻、欠席しないことなどは私にとっては当たり前のことだが、教室において考える自己責任はそれだけでなく、クラスメートの授業の取り組み方に影響されたり、自分のその教室活動の捉え方が変わったりすることなどによって、自分の中の自己責任も変わる気がする。つまり、学習者の自己責任が絶対的なものではなく、相対的、変化するものなので、活動の最初からこれを守ってほしいと提示することは不可能であろう。だから、学習者主体のク

ラスにおいて、教師は学習者の自己責任を養う環境を提供することができるが、学習者に自己責任が生まれるように働きかけることができないのではないかと考えた。これで、私は学習者主体クラスでは学習者の自己責任が前提とされることを、ようやく受け止めるようになった気がする。

2.5. 総合活動型日本語教育における支援について

ここまでの議論によって、学習主体である総合クラスに学習者の自己責任が問われることを納得することができた。しかし、サポーター側の我々には何かができるのかという問題はまだ解決できていない。私は学習者として経験した「言語・文化」では、なぜクラスの皆さんが活動の中で徐々にいい味を見せてくれたのかを考えてみた。それはクラスの中で最初から自分のやる気を見せる人がいたからだと思う。つまり、どのくらい自分が自己責任を働かせて、その自己責任を果たす姿勢はどのくらいクラスの中で影響を及ぶのかは一番原因だと思う。そこで、うまく動いたのはサポーターが何かを支援してくれたからではなく、サポーターも含めてそのクラスのメンバー達がお互いに影響し合った結果だと思う。この話をYさんに話したら、

Y：私はそれも大切だと思うね。だからある程度、最初から学習者の気持ちが育つような形でのサポートをしていくべきなのではないかと少し思うんだけど。本当にこの活動で何をするのかはわかってない人も結構いるよね。最初の頃はそれに伴う責任とか、そこまでみんな考えてないでしょう。確かに説明してもわからないところがあるのはあると思うけど。

L：この問題は総合クラスを検討するときにも出てきた。学習者は総合活動の意味がわからなく、苦しんでより、最初からこの活動の意味を説明してあげれば、活動をスムーズにやっているのではないかと意見があった。私も最初この意見に同感したけど、この活動の意味は、やはり言葉の説明で教えられないんじゃないのかなと思う。結局この活動の意味は、この活動を一通りやってから、自分を振り返ってみるときに、この活動の意義を自分で捉えるしかないと思う。最初からこういう意義を学習者に教えるのが私は無理だと思う。やっぱり人それぞれの捉え方が違うし、この活動の意義はいろんな可能性があるから、最初から提示する

ことはできない。このような苦しみがあったからこそ、かえって人にいろいろ考えさせるのではないかと思う。

今までの対話から、Yさんは教師の立場として、学習者の自己責任を求めるといふより、学習者へ有効な働きかけは大切だと思っていることが伺える。そこで、Yさんに総合における支援をどう考えるかを聞いてみた。

Y：学習者たちが主体的に動いているのはリーダーなりサポーターなりそこら辺の力はすごく大きいんじゃないのかと感じた。リーダーなりサポーターなりの持っていく方、何もしてないように見えるかもしれないけど、学習者がそこに関わっていくという方向に持っていくのは、グループを運営することは本当に大変なこと。それに関わっていくのは絶対簡単じゃない。簡単そうに見えると思うんだけど、私はとてもできませんって感じ。

L：それは、どれくらいこの活動を一つの共同体として見ているか、どれくらい自分の力を尽くすか。サポーターすることだけじゃなくて、本当に真剣にこの活動のメンバーと関わっていくという。質問する、コメントするなど大事だけど、その上にこの人たちとの関わりに自分が真剣になっているという姿勢を見せるというのが私はすごく大事だと思う。そうすると、ここはただ勉強の場だけじゃなくて、一つのコミュニティーなのだ、この人になら何も言える、自由に発言できる、そういう気持ちを学習者に持たせることは可能だと思う。サポートのやり方以上、心の問題がある。だから、総合は人の心を動かせる力があるんじゃないのかなと思う。

Yさんとサポーターの支援について話しながら、自分が「言語・文化」を履修したときのことを思い出した。そのとき、サポーターとしてクラスに入ってきた院生にサポートしてもらったという感覚は全然なかった。私にとってはただ仲間の一人だという存在だった。このことから考えると、私は方法論レベルで支援を考えるより、この総合の場を一つのコミュニティーとして見なして参加する自分の姿勢を見直したらどうかと思った。総合の場は協働的な場が望ましいので、学習者にいかに有効に働きかけることは大事だが、人を動かそうとする前、自分がどのように動きたいのかを考

えることはもっともなのではないかと思う。そこで、学習者はどのような姿勢で授業に取り組むのかは学習者の自己責任だが、サポーター側も自分の自己責任を働かせて、それを学習者に見せることによって、学習者に働きかけることになるのではないかと私は思う。私が考える総合の場は学習者を学習者として見るのではなく、一人の人間として見るので、様々な人との出会いの中で、自分がその人たちにどのくらい影響を与えるのか、自分と勝負していくことは一番の課題だと思う。問題を想定して解決しようと思ったら、終わりがないだろうと思う。

2.6. 教室場面における教師の役割・責任

今までYさんとの対話から、Yさんは教室における教師の役割について固い信念を持っていると見受けられる。それで、もし自分の教室を持てるとすれば、それをどのような教室にしたいか、また教室における教師の役割についてYさんに聞いてみようと思った。

L：Yさんにとっての理想な教室とは？

Y：やっぱり実践をすぐ考えちゃうから、なかなか現実を切り離して考えるのは非常に難しいのかな。理想といえば、学習者同士が学び合うのは私にとって一番の理想。教師が一方的に教えるのではなく、学習者お互いに持っているものを出し合って、学んでいく状況が一番習得促進されるかな。例えば、グループがあって、その中に日本語がよくしゃべる人としゃべらない人がいて、グループに参加することによって、この人はこの人なりの学び方があると思う。しゃべらないひとだって、強い部分あるだろうし、他の人が持っていない部分を持っていることあるし、だから、そこらへを出すことによって、日本語に付随するもの、日本語だけじゃないものだっていっぱいあるし、そういうところはうまく調和されていくようなものが望ましいかな。つまり、ことばじゃないもののやりとりがそこで行われる可能性がある。すごく抽象的だけど。

この話を聞くと、Yさんが考える理想的な教室は学習者主体クラスともいえると思った。しかし、Yさんが考えている学習者主体クラスは総合の学習者主体クラスと

少し違う気がする。Yさんは学習者主体のクラスでは学習者が真剣に授業に取り組む姿勢が必要で、教師として学習者の気持ちが育つように、そのような状況を作り出すことは大事だと言った。この点に関しては、総合で望ましい教師、サポーターの役割と共通していると思う。違うのは、総合の言う学習者主体クラスには学習者の自己責任が必要とされているのに対して、Yさんは学習者主体クラスをさせるために、学習者の自己責任に任せるより、教師が注意する、提示する必要があると考えている。なぜYさんが教師として、引っ張ったりするなどの役割を果たさなければいけないと思っているかを問うと、

Y:それはやはり責任としてあるじゃないのかな。じゃ、何でもいいです、はい、じゃだめだと思うね。だって教室の中に教師という立場で入るよね。もちろん学習者同士が相互にやってくればそれがいいんだけども、そういう環境を作り出してあげなきゃいけないわけだよ。少しでも学習者が真剣に取り組めるような場を、こっちとして作り出す必要性があるじゃないのかな。

L: Yさんにとっての教師の責任とは？

Y: 学びのある場を作り出すこと。じゃ、一応こういうことでクラスはあれでしたが、後は自分たちでどうぞ、じゃ困るでしょう。教師は責任を放棄しているよね。じゃ、教師がいないのはいいのかな。じゃ、なんのために教師がいるの？

L: 教室に教師がいるのは、理念を言う、そのまま自分の理念を言うんじゃなく、例えば、今の細川先生の総合だと、相互評価の三つの基準、それを見る目を持つようにさせるために、活動を繰り返している。それはある意味では教師が自分の理念をずっと学習者によびかけている。そこで出てきた問題を解決するように努力するけど、一番メインなのは教師が自分の理念を学習者に浸透させるために、教室の活動を通して学習者に呼びかける、働きかけることだと思う。それとYさんが考えている教師の責任とはちょっと違うかな。

Y: いや、わからないけど、繰り返は学習者に浸透していくための状況も必要なのわけでしょう。いくらこっちから働きかけても、学習者がとるかたらないかわからない。だから学習者がとりやすいような状況を作り出すことも大切。

L: じゃ、教師の責任は学びの場を作ることとしたら、教師の立場とは？

Y: 仕方がないよね。そういう立場というのが最初からあるわけだから。だって学

習者として教室に入っているわけじゃないよね。だってお金もらっているわけだし、最初からもう立場が違う、それは当然なことなんだけど。学習者じゃない。教室場面というのは、教師がいるのが前提だよ。私が教師という立場で入ると、もう教室という立場が存在する。それでどうしてもそういうのが教室に存在してしまう。その教室の中でやっぱりならなきゃいけないことがあるはずでしょ。

L：やらなきゃいけないことはどういうこと？

Y：学習者が学習すること。じゃ、教室を通わなければ、別に家で勉強してもいいわけじゃん。じゃ、自習で何人が勉強してもいいわけじゃない。

最初、Yさんとの対話の中、教室に慣れあいのような雰囲気が流れたり、学習者が活動に真剣に取り組んでくれなかったら、それを注意したり、最初から規律みたいなものを提示したりすることは教師側としてやるべき責任だし、学習者側も従うべき義務だと私も思った。Yさんとの一連の話、また実践授業の議論によって、私の考えた方は少しずつ変わった。最初、私はYさんと同じように考えていたのは、教師－学習者のあるべき立場という従来の固定観念が頭の中に植えついていたからだ。今は総合活動型における教師と学習者の関係は、教える側と学ぶ側との関係ではなく、教師も学習者もお互いに学び合うというふうに捉えているのではないかと思うようになった。

対話においてYさんは教師の責任は学びの場を作り出すことを言ったが、教室の場では学習者は学習しなければならないというYさんの考えから、Yさんは教師が学習者を学習させる責任があるというニュアンスが私は読取れた。しかし、学習者主体のクラスは学習者が自ら学習したいことは望ましいと私は理解している。結局学習者に学習させるという教師の責任感というのは、教師が教室の場をコントロールする意欲の表しなのではないかと考えた。そこで、Yさんは学習者の自己責任が問われる学習者主体クラスは、教師の責任を放棄したように見えたからなのではないか。このように当たり前のことでありながら、Yさんとの対話、また実践の授業での議論を通して、私は少し従来の教師対学習者の固定観念から解放された気がする。

■ 3. 結論

私が最初動機に書いた、私にとっての総合型日本語教育は、学習者同士もサポーターも親密な関係を築き、お互いに影響し合っているうちに、成長していく場という仮説は、早い時期ではもう Y さんとの対話の中で出てきた「慣れあい」ということばで大きく動揺された。Y さんの実際経験した総合の問題を聞いて、また今期の総合実践に出てきた問題を自分の目で確かめてきたので、総合型日本語教育における支援のあり方と捉え方について、自分の中で揺れ始めた。しかし、Y さんと何回も対話をし、実践の授業で様々な議論をし、自分と向き合って考えることによって、揺れた自分の立場が徐々に安定してきて、そして新たな立場が形成され、固められた。

この三ヶ月にわたって、Y さんとの対話を通じて、私が考えた総合における支援のあり方は大きく変化した。最初、私は自分が立てた仮説に確信を持っていた。人と人の親密な関係は何よりも大事だと思った。しかし、Y との対話を通して、慣れあいに流れてしまう可能性を知り、それを防ぐのは、教師側（サポーター側）は力を入れるべきだと思った。このような考え方は動機に書いた、支援のあり方は学習者と平等でありながら学習者同士のインターアクションを促すという役割と矛盾している。それは私の中に教師権威という考え方が植えついたことに気づけなかったからだ。そして、実践の授業の中で学習者の自己責任という議論が出てきたが、私は学習者の自己責任ということばを、素直に飲み込むことができなかった。そして、中途半端な理解で Y さんと議論したら、Y さんの反論を買うだけだった。しかし、私は自分が被支援者として経験した総合の授業を振り返って、自己責任を考えてみると、自己責任は絶対的なものでなく、相対的に変化するものであり、教師側から要求できるものじゃないと悟った。また、Y さんとの対話から強い教師観が伺い、その裏にある背景を探っているうちに、私も Y さんと同じように、学習者が学習すべき、教師が学習者に学習させるべきだという固定観念を持っていることを発覚した。この気づきから、学習者

主体である総合を改めて考えると、総合の場に参加するメンバーは、学習させる人でも学習させられる人でもない、教師（サポーター）も学習者もお互いに学び合っているのではないかと考えるようになった。

このように考えると、私が考える総合における支援のあり方も変わってきた。私は今まで総合における支援に関して、サポーター側としてはいかに学習者に有効に働きかける、学習者のインターアクションを促進するという役割があると考えていた。今は、それよりサポーターはいかに自分の自己責任を働かせることのほうが大事だと思う。結局、総合の場では、学習者の自己責任だけでなく、サポーターの自己責任も問われる必要があると思う。それは、私の動機に書いたように、総合ではサポーターも学習者もそれぞれの身分の境目がなくなり、一つの共同体となるからである。総合を一つの共同体として参加するメンバー達は、お互いに影響し合うために、自分なりに考えた責任を果たし、自分の力を尽くすことはまず第一歩だと思う。そこで、私が今考えている総合の支援というのは、一人の人間として、総合というコミュニティーに入って、そのコミュニティーに参加する人たちを助けるのではなく、その人たちと一緒に学び合っていくことと、コミュニティーの一員として、そのメンバーと自分が真剣に関わっていく姿勢を見せ、自分の自己責任を働かせることによって、コミュニティーの中の人たちに何らかの影響を与えて、発信していくことだと捉えなおした。

もう一つ自分の中に揺れがあったのは総合への捉え方である。総合の場をどのように捉えるかについて、私は今でも最初と変わらず、同じように捉えているが、今という時点にたどり着くまで、その捉え方が揺れ続けてきた。実践の授業では学習者に総合の意義を教えるかどうかという問題について、学習者に最初から総合の授業の主旨や目標を教えるべきなのではないか、学習者が授業の目標がわかれば、すんなり授業の活動に入ってくれるだろう、という議論が何回もあった。また、実際の総合実践で総合の目標が見えなく苦しんでいる学習者を見ていたので、私も教師として学習者に総合の意義や目標をある程度教えてあげたほうがいいのではないかと考えた。

しかし、Yさんとの対話を通じて、この問題をもう一回考え直して、そして自分な

りの考えを出すことができた。私はかつて履修した総合の授業を振り返ってみて、学習者の立場だった自分がどのように総合の授業を捉えたのかを思い出してみた。そのときの私も総合の活動で何が求められているのかをずっと考えながら戸惑っていた。しかし、活動の最後は私なりに総合活動の意義を見出した。つまり、活動の間に私が考えた総合の意義は中間的なものであり、活動の最後に出した意義は最終的に考えたものなので、私の総合への捉え方はずっと変化していた。また、私の考えた総合の意義は必ずしも教師の細川先生が捉えているのと同じではないと言える。とはいえ、細川先生の考えと異なるとしても私が捉えた意義は総合の意義ではないとは言えない。「私」が捉えた総合の意義は私には意義があるが、細川先生が捉えている総合に私は意義を感じないかもしれないからだと思う。つまり、学習者が総合を捉える際に、「自分」には何か意義があったのかを考えるため、自分ではない他人（教師も含める）と違う捉え方をするのが当然だろう。

このように自分が学習者の立場に戻って考えてみると、総合をどのように捉えているのかは、学習者の一人一人が時間をかけて考えていく問題なので、教師やサポートの我々から、総合という授業は何々を目指しているよということを学習者に説明するより、学習者自身が全部の活動を通してから、自分なりに総合を捉えるしかないと思うようになった。そこで、もう一回私にとっての総合型日本語教育とは何かを問うと、答えは動機の仮説と変わらない。学習者もサポーターもみんなが一つとなり、共同活動をするうちに、お互いの付き合いが深まり、影響し合いながら、言語習得のみならず、人間関係、自分への認識、考えの確立なども成長していく場であると捉える。ただ、Yさんとの対話と実践の観察と授業の議論を通して、教師として総合の捉え方に基づき自分の教育理念をクラス活動の形で学習者に呼びかけるが、学習者に自分で総合の意義を捉えるという思考の空間を与えることも大事だと思うようになった。それは学習者が総合を自分の目を通して、体で感じてから自分なりの意義を捉えてほしいからだ。そうしないと、総合で得たものは自分のものにはならないと思う。

Yさんとの対話のプロセスでは、Yさんが語ってくれた総合の問題で私の総合型日

本語教育の捉え方は現実と離れて、理想すぎるのではないかと動揺した。しかし、対話のプロセスを経て、Yさんと自分の価値観をぶつけながら、迷路の中から自分の行く道がまた見えてきた。Yさんの経験のように、状況によって最後のゴールまで至らない場合もあるかもしれないが、私は総合が人の心を動かせる場だと信じており、自分の立場を確立しているからこそ、ゴールに向かって支援なり努力なりすることができると思う。そこで、Yさんとの対話によって、私は総合における支援のあり方を捉えなおしたが、総合の捉え方という自分の立場は改めて固められ、それを確信するようになった。

■ 4. おわりに

今回の総合の実践研究では、私にとって一番意味が大きかったのは、対話の意義を改めて理解することができたこと。私は対話を、「言語文化」を履修した時に初めて体験した。今回の実践研究での対話は二回目だが、Yさんと対話していたとき、感じた壁は一回目の対話の時と同じだった。自分が聞きたいことを相手から聞き出せなく、議論になっても即時自分の考えを出して、議論を深めていくことができなかった。このことは私にとって衝撃的だった。結局私は一年の前と変わらず何も進歩していないことで挫折を感じたからである。また、実践研究の授業では、他の実習生の対話報告を聞いたら、密度が濃い、質がある議論だなあいつも感心している。そうすると、自分の対話が下手であること以外、対話の相手を、総合型日本語教育をよく考えている人にしてよかったのかなとも考え始めた。さらに、とうとう自分が留学生であることで、やはり日本語による思考、日本語による対話において限界にあるのではないかと、自分の不器用で逃げ口を作ろうとしていた。

しかし、野波さんの対話の相手、Mさんの「等身大の自分」という言葉で、私の目が行く方向が間違えたことに気づかされた。私は「言語文化」での対話を経て悟った「自分のありのままを認めること」を忘れていた。他人と比較するより、自分を見

つめて、自分のオリジナリティーを作り出すほうが大事だと思えた。また、古屋さんの対話所感を読んで、自分の対話の姿勢が間違えたことに気づいた。古屋さんは対話がお互いの価値観をぶつかり合うことだと言った。このことは細川先生が授業中数えられないほどしつこく言っているにもかかわらず、対話で私はいつのまにかまた聞きたい、調べたい人になってしまい、自分の価値観を言い出しっぱなしで、Yさんに何か美味しい話を求めていた。結局、一回目と二回目の対話でYさんの価値観を触れずに終わってしまった。

反省をふまえて、三回目対話では、私は方法論というレベルの議論から脱出して、ようやくYさんの教師としての価値観を少し聞き出すことができた。これは価値観のぶつかり合った議論なのだと実感することができた。そして、対話を終えてから、レポートを作成する際に、じっくりYさんの対話を消化して、自分に問いをかけると、意外と自分の中から新たな発見がいっぱい出てきた。つまり、実践研究では、動機から対話を経て最後のレポート作成に至る作業は、思考と表現の往還で自分の中にある「考え」（＝価値観＝文化）という原石を磨くことによって、その考えをつぶしてから再生成したり、再確立することができる。

このように、私は自分が忘れていた大事なことを思い出し、自分との戦いに向き合うことができたのは、実践研究で実践のメンバーと何でも分かち合える、何でも議論できるという場を提供してくれたからである。私にとってこの実践研究は総合と同様に、私もこのコミュニティで、そこにいる仲間たちが影響し合う中で成長した気がする。今回の実践研究を通して、私が経験した理想的な総合はただ偶然ではないことを確信することができた。総合の可能性は自分で作り上げていくものだと思う。自分と戦うことを恐れる人だと、恐らく総合から逃げたくなるだろう。私は二度も自分とよい戦いができたのは、総合のコミュニティで出会った人々に恵まれたことと、私のしつこい対話を付き合ってくれたYさんのお陰だと思う。この貴重な三ヶ月を一緒に付き合ってくださいました皆さんに、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。